

編場道民良

178

海内閣情報中佐官

高瀬五郎述

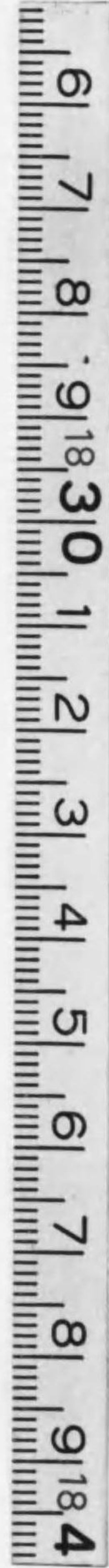
10美

世界情勢と戦争の始

特241

166

416



始



特241
166



良民道場編

獨ソ戦争と世界情勢

内閣情報官 高瀬五郎述
海軍中佐



東京日々新聞記者 村田忠一著

新聞記者の眼

本書は我國の新聞發刊當時より今日に至るまでの新聞紙面に現れた種々な事件を通じて、その時代の世相を觀、また逆に世相を通じて新聞の變遷、進歩等を研究したもの。著者は東京日々新聞生え抜きの敏腕なる社會部記者。その豊富な體驗を基礎に過古幾多の事件を取上げて、これを研究し解剖し、更に進んで明日の新聞の進むべき道を暗示する。本書によつて初めて新聞の生きた姿を知り、紙面の底に流れる脈々たる血汐の音を感じ得るであらう。

裝釘 棟方志功

B 6 列三二〇頁美本 定價一圓六十錢 送料十錢

東京牛區 早稻田卷町 時代社 振替東京 一六一四番

獨ソ戦争と世界情勢

内閣情報官
海軍中佐 高瀬 五郎氏述

(昭和十六年七月一日於良民道場)
文責 在記 者)

今の御挨拶にありましたやうにこの『良民道場』が出来上つて、最初に私がお話申上げるといふことは、吾人と致しまして大變愉快に存じて居ります。御覽の通り未だ私は若僧でありますから、皆さん方に御満足の載けるお話が出来るかどうか、ただ軍人でありますから、今日の國際狀勢に就きましては、皆さん方がお忙しい傍ら、新聞をお読みになるよりは、私共の方がしよつちう喰付いて居りますから、これを筋道を通してお話申上げること致さうと存じて居ります。皆さん方が御承知の通り「獨ソ」が開戦致しました結果、この問題はどうか

らうか、この問題によつて、日本が又どんなになるであらうか、といふことが今一番大きな問題であります。この「獨・ソ」の開戦により、ますます國際狀勢の變化に先だつて、二十一日に「獨・ソ」の開戦が起りました。以前の狀勢を知つて居りませんと、お話が出来ませんから少し二十日迄のお話を致さうと思ひます。

この「獨・ソ」の開戦があるなしに拘らず、國際狀勢は刻一刻と急迫して參つて居りました。従つて日本を中心と致します太平洋の問題も急迫して參りました。即ち太平洋に於きまして、日本と「アメリカ」とがぶつかる危険があつたのであります。

それには原因が二つあつたわけで、一つは所謂「蘭印」の問題であつて、第二の問題は大西洋の「獨・米」戦争が日本と「アメリカ」の戦争に點火致して參る、この二つがあるわけでありませぬ。そのうち最初の「蘭印」の問題、これは御承知の通に「蘭印」が「イギリス」や「アメリカ」の宣傳に乗せられて、「英・米」側が、「日本」・「ドイツ」・「イタリー」の樞軸側に勝つといふことを過信致しました結果、日本の道を盡した經濟交渉に應じませんのみならず、芳澤大使に對して、「これ以上交渉を續けて役に立たぬからお歸りなさい」といふやうな亂暴な言辭を弄しました。

そこで日本と致しましては今迄日本の道義外交により道を盡してお話して來て居るが、お前の方がさういふ態度であるならば、俺の方も最後の決意をするより外に方法がないといふので、芳澤大使の引上げを執行したのであります。従つてその後に来る問題は言はなくとも國民全體の方々に御推察の着く問題であります。私はこれに就てこれ以上申し上げませんが、何故「蘭印」の問題がこんなになつて來たか、「蘭印」が又なせそれ程重要な問題であるか、即ち日本と致しましては事變第四周年を迎へるのであります、事變の目的は日本と滿洲國と支那、この三つが手を握りまして「亞細亞人」の「亞細亞」——、經濟的に政治的に軍事的にもこの三者を一體とする體制を創り上げるといふのが目的であります。

ところがそれを喜ばない「イギリス」「アメリカ」は、その極東政策から割り出して參つて、日本に「日・滿・支」一體となりませぬ體制の完遂されることを喜ばないで、これを阻止妨害致します爲に、御承知の通りにこれ迄日本が「英・米」に經濟的に依存して參つた、即ち日本の對外貿易の八割は「アメリカ」に依存して居る、しかもこの依存して居ります物資の中には事變處理に必要な大事なものが含まれて居つた

のであります、鐵屑又は航空機に必要な「ガソリン」更に又軍艦やその他自動車とか所謂、戦争に必要な石油迄「アメリカ」に依存して居りました、その點を「イギリス」と「アメリカ」とは日本の弱點と見て居るのでありますから、この日本に出して居る物資を停めてやらう、さうすれば日本はへたばるであらうといふので、今日物資の禁輸といふことをやつたのであります。

さうすると日本は外からこれらの物を持つて來なければならぬ、これが所謂、東亞共榮圏の確立といふ旗印に書きなほされて來たのであつて、果物に例へれば真中にある固い種が「日・滿・支」一體の體制で、圍りに我々の載く實があるのであります。この兩方が一緒になつてこそ果物となり得ると同様に、そこに日本と致しまして東亞共榮圏はどこ／＼の地域といふことはハッキリ申して居りませんが、これは日本の國力が膨張して參れば、段々日本の内に吸ひ込まれて參るのであります、國內が未だ充分でないうちから、第三國の殊に敵性國家と密接な政治的、經濟的な關係を持つて居る地域迄これは俺の東亞共榮圏だといつて反感を買はないでも、そのうちには黙つて自分のうちに引取つて行けるものだといふ考へで、今日はハッキリいはないわけ

あります。

二

東亞共榮圏に力を示した第一彈は「佛印」と「泰國」の停戰協定であります、これが成功して「佛印」が「アメリカ」から來なくなつた物資の肩替りをする事になつたのであります。

しかも最も必要な石油は「蘭印」にしかありませんので「蘭印」との經濟交渉となつたのであります、石油はありません、又「ゴム」「錫」これらを獲得する航空路の問題、かういふことを包含致しまして交渉を行つたのであります、ところが日本の所謂、この東亞共榮圏の交渉が、着々進んで參つて、自給自足出来る事になつたならば、鬼に金棒ですが、「日・滿・支」一體の體制すら「イギリス」「アメリカ」は喜ばないのでありますから、東亞共榮圏を確立して、日本が自給自足を完全に行ひ得ることになつたら、「イギリス」「アメリカ」は大變な事になつて「亞細亞」から放逐されることになるわけで、殊に「蘭印」の問題は「アメリカ」の極東政策の最後の據點でありまして、日本は「蘭印」の現状改變をなさないことをば、一九四〇年六

月の「オランダ」本國が「ドイツ」に席捲された時に、これを聲明致しました。その時、「アメリカ」も亦東亞の現状改變をなさないといふことを聲明しましたことは、皆さん御存知の通りであります。今日「アメリカ」は「蘭印」に對して日本が實力に訴へるならば實力をもつてこれを阻まなければならぬ状態になつて來て居るのであります。

そこで「蘭印」の問題は、日本にとつて大切な問題であると同時に、日本と「アメリカ」ととつて、死力を賭してこれを争はなければならぬといふ關係になつて參つて居るのであります。しかも「蘭印」の問題は今申上げましたやうに、刻一刻重大なる時期に追ひ詰られつゝあるのであります。

結局これは「日・米」の關係が刻々急迫しつゝあると言ひ得るのであります。

第二の問題は大西洋の問題、これは「イギリス」が「ヨーロッパ」に於て「獨・伊」から追ひ詰られて參つたといふことが、直接の原因として、元々「アメリカ」と致しましては「イギリス」とは國柄が同じであります、同じ「アングロサクソン」民族であります、民主々義國家で持てる國の兩巨頭でありまして、「アメリカ」と致し

ましては自分の國防の萬全を期するのは「イギリス」を救ふにあるといふ「アメリカ」の考へ方に従つて、「ヨーロッパ」で戰爭を行つて居る「イギリス」を援助して參つた。ところがその「イギリス」が「獨・伊」から段々追ひ詰められて來て、援助を積極化さなければならぬといふことになつて來たのであります、何故さうなるかといふと「イギリス」が「獨・伊」に追ひ詰られて來たといふことには、二つの問題があります。

一つは「スエズ」を中心する近東方面の戦局であります。

いま一つは「イギリス」本土の「ドイツ」潜水艦及び飛行機による逆封鎖であります。「イギリス」の本國は地圖で御覽になると判りますが、本國はチツポケな國であります。物資は日本より自給自足に於て乏しい國柄であります。それを御承知の通り世界の各國に先だつて、かたゞはしから植民政策を行つて、有望な地域を手に收めてしまつたのであります。「イギリス」と致しましては一朝有事の場合には有力な海軍力で本國と植民地との間の海面を完全に握つて必要な物資を運んで參る、この自給自足が完全になされることによつて自から長期戦争と體制を固め乍ら「獨・伊」を経

濟枯渴戦に追ひ込むといふのが「イギリス」の戦争のやり方であります。この「イギリス」と植民地とを繋ぐ連絡線に於て、一番大事なものは、「イギリス」本土から地中海を通り「スエズ」を中心とする近東、それから「オーストリア」「印度」これを通ねるものが「イギリス」の生命線で最も大事な線であります。近東方面は生命線の一つの環になつて居ります。これを抜かれる時は「イギリス」の長期戦争體制が破れる時です。従つて「ドイツ」と「イタリー」が一緒になつて「ギリシャ」を席捲して「イラン」「イラク」から「スエズ」を攻めようとする態制になりましては、「イギリス」はこの方面に於て、誠に形勢不利なりと考へられるのであります。

第二に英本土逆封鎖のことであります。英本土は御承知の如く、その植民地からの物資移送によつて辛うじて長期作戦をやつて居るのであります。ドイツの狙つてゐるのは、勿論、この逆封鎖をすること、で、「ドイツ」は盛んに潜水艦、飛行機によつて植民地から自給自足に運んで来た物資を待受けて叩付けて居るといふ作戦をとつて居ります。そしてこれ迄に丁度一千万トン近くは叩付けて居ります。

戦前に「イギリス」の持つて居りました船舶は二千万トンを少し超過して居りました。ところがそのうち千万トンをいきましたので、あと千万トンであります。

そこへ「イギリス」は「ノールウェー」「スエーデン」「デンマーク」等の小さい國々、これらの商船を皆自分の手に収めてしまつたわけでありまして、これが八百万トン近くあるわけでありまして。さう致しますと手持は千八百万トンであります、そのうち四百万トンは「イギリス」海軍で徴用しなければならぬので、残り千四百万トンが今日「イギリス」の持つて居ると豫想される船舶であります。

ところが「イギリス」は自給自足致しますのに最少限度千二百万トンの船舶が必要なので、さう致しますと、残る二百萬トンしか餘裕がないわけであります。戦前には生産三百萬トンでありましたが、今は「ドイツ」の爆撃で造船場が叩かれ資材もなくなつて居りますので、年産は百萬トンであります。これを月別に致しますと、十萬トンに足りないといつたやうなわけでありまして、「アメリカ」と致しましては、「イギリス」に商船は分けてやらうとしても「アメリカ」自身が商船の不足を訴へて居るので到底分けてやれないのであります。

かく「イギリス」本國は商船不足の結果物資の不足を告げて參つたのであります。戦前は八ヶ月からの食糧を貯藏して居りました「イギリス」が、僅かに二ヶ月の貯藏に變つて參つた。

「イギリス」は被服類は潤澤でありまして、日本すら「イギリス」の毛織物等を買つて居りました。この「イギリス」の被服類すら最近では切符制度を採用するに至りましたことは如何に國內が物資の貧窮にあへいであるかを見る良い例であると考へられるのであります。理論上はこの儘「ドイツ」が逆封鎖を續けて行くとしたならば、今日「イギリス」の船舶不足の爲に「イギリス」は自給自足が段々出来なくなつて來るといふ状態に追ひ詰められて來て居るのであります。これが即ち「イギリス」危しといはれて居る點でありまして、逆封鎖「スエズ」を繞る近東方面の狀態、二つながら「イギリス」が段々窮地に追ひ詰められて居る状態でありまして。

従つて所謂「アメリカ」が「イギリス」を援助してそれによつて自國の國防を全し得ると考へて居るので、所謂「イギリス」援助に積極的の乗り出さなければならぬといつて居るのであります。が、「アメリカ」が積極的援助に乗り出す上に「イギリス」の船舶が不足して居ります。それで「アメリカ」が自分の船で資材を運んでやらなければならぬ、ところが運んで行く商船がその儘「イギリス」の海岸へ行くとして「ドイツ」は英本國の周圍沿岸から「アイルランド」を含む龍大な海岸を完全に抑へることと出来るのだと宣傳して居ります。

そしてこの地域に入つた船舶は、水上艦隊によつて撃沈すると云つて居ります。それで「アメリカ」は商船を、軍艦を持つて行つて護送しなければならぬ、この護送を致します爲には莫大なる軍艦を必要と致します。

しかし「アメリカ」は大西洋に二割の艦隊、八割の艦隊を日本を牽制する爲に太平洋に集中致して居りますことは皆さんは新聞等で御覽の通りで、たつた二割の海軍で大西洋の護送をやらうといふことは、到底出来ないこととあります。さうかといつて太平洋から大西洋に軍艦をもつて來るといふことは、日本を抑へるつもりで八割の軍艦をもつて來て居る、それでも足りないで「日・獨」同盟締結以來、四百五十億圓の金を出して軍艦建造に狂奔して居るのであります。この自信のない艦隊を割くといふことは到底出来ないことであつて、そこで「アメリカ」は商船護送に代へて沿岸

哨戒をやる、これは飛行艇を使つたり或は高速モーターボートを使ふといふことをいつて居ります。商船の護送に飛行艇、高速モーターボートをもつて完全を期し得るか
どうか、これは専門家から見れば出来得ないことが直ぐ解るのであります。

「アメリカ」と致しましては「イギリス」を援助しなければならぬ、なんとかして「ドイツ」を押へなければならぬといふのは結局嫌がらせでありまして「イギリス」を援助し「ドイツ」を牽制するといふ嫌がらせのゼスチュアを示して居るに過ぎないのであります。

いま一つ「アメリカ」が飛行艇若しくは高速モーターボートをもつて商船の護送をこゝに決行致しますと假定致します——一部には既にもう「ニューギニア」「グリーンランド」「アイスランド」の線を傳つて飛行機をもつて来て居ります。ヒットラーはこの線を突きます爲に出て参りました、戦闘機等も大分運ばれて居るのであります。が、「ドイツ」はこの裏を叩かうと考へて居るので、こゝに「ドイツ」の潜水艦と「アメリカ」のこれを護送致します艦隊との間に衝突が起るといふことは「ドイツ」の海軍長官レーダー氏が若し「アメリカ」が英國に物資を運んで来るならば、これは

敵性と考へてこれは武力をもつて叩き付けるといふことを言つて居ります。

これはレーダーの言を俟ないでも日本もさうでありまして、死力を盡して戦つて居る相手を助けに来るものがあれば、これをやつつけるといふことはいふ迄もないこと
で、今日日本が蔣介石を叩き付けて居りますが、この蔣介石を陰に陽に助て居る「イギリス」「アメリカ」を我々は敵性國家としてなにか機會があつたら叩き付けてやらう
と考へて居ると同じであります、従つて大西洋に於て「ドイツ」と「アメリカ」
の間の問題は既に先般「ロビンムーアー號」といふ「アメリカ」の商船が撃沈されま
した、しかしその前にも二・三隻「アメリカ」の商船がやられて居る、しかし「ドイ
ツ」も「アメリカ」も未だ戦争に迄展開させたくないで發表しなかつたので、ただ
「ロビンムーアー」の問題だけは南米の中立國から公表されてしまつたので、この「ロ
ビンムーアー」問題を中心にして「ドイツ」と「アメリカ」の間一段と急迫して「ア
メリカ」は「ドイツ」の資金凍結、「アメリカ」にありませぬ「ドイツ」の領事館、ツ
リスト・ピエローの閉鎖を命じ、「ドイツ」も亦去る十五日に「ドイツ」本國或は占
領地の資金凍結或は「アメリカ」第五列部隊の活動を助長するやうな機關の閉鎖を命

じて居ります。更に今日の新聞を御覧になるとお判りのやうに「オランダ」の商船に「イギリス」にある「アメリカ」の大使館を守る意味で「アメリカ」の陸戦隊と「アメリカ」の看護婦が乗つて居りました、ところが「ドイツ」の潜水艦にやられて目下盛に陸戦隊、看護婦の行方不明者を探して居ります、この問題は「アメリカ」と致しましては数日の間に「ドイツ」に對して強硬な抗議となつて現れて來ると思ふ、或は又この問題が原因となつて「獨・米」關係が急迫の最高潮になつて來るかとも考へて居ります。兎も角、大西洋に於て「獨・米」のぶつかつて參る徴候が現れて參りましたので、かうなりますと所謂「ドイツ」と日本は手を握つて居りますから日本と致しましては太平洋に於て「ドイツ」側に加擔して「アメリカ」と戰つて參ることになつて參るわけであります。即ち大西洋問題は極めて急迫化して參つたのであります、これによつて太平洋の「日・米」關係も亦急迫を告げて參つたと言ひ得るのであります。さうしてこの太平洋に於きます問題は「蘭印」とか「泰・佛印」の協定とか段々火がついて參りつゝあつたわけであります。これが先づ二十一日「獨・ソ」開戦前の大きな流であつたわけであります、そこへもつて來て二十一日に「獨・ソ」開戦が突如として世界に發表されたのであります。

四

これは「ドイツ」は三ヶ月程前からこの開戦を決意致して居つたと後からいはれて居るのであります、しかしこんな早く「獨・ソ」開戦に展開されようとは恐らく世界全體が考へて居らなかつたと思ふのであります。何故「ドイツ」と「ソヴィエト」が戦を交へるに至つたか、この理由は「ドイツ」は所謂「ヨーロッパ」を席捲し更に今年の初から天候の回復致します四月を待つて「バルカン」工作に乗り出して參つたのであります、さうして近東方面に迄「イギリス」と「ドイツ」の戦は進んで參つたのであります。で近東方面の問題になると「ソヴィエト」との間にも政治的に話をつけぬとまづい問題があるので「ドイツ」は「トルコ」「イラン」「イラク」と進攻致しまして「ソヴィエト」と話合をつけなかつた、これが巧く行かなかつた、しかし「アメリカ」が「イギリス」の積極的援助に乗り出して參つた、これは「イギリス」の敗色が濃厚になつて居ります態勢を挽回して行くことになつて、これで「ドイツ」は長期戦體制を整へて置かないことには安心出來ない、「ウクライナ」にあ

ります小麥とか或はその他の食糧品、或は「コーカサス」の石油、これを收めなければ「ドイツ」の長期戦體制といふものは完全にならぬ、どうしてもこれを完全に收めてやらうと「ソヴェエト」との間に「コーカサス」の地下資源、「ウクライナ」の食糧に就きまして融通して貰ふやうに交渉を重ねて参つたのでありますが、「ソヴェエト」はなか／＼いふことをきいて呉れなかつた、この理由で今度の大きな戦争が起つた時に「ドイツ」は世界の考を裏切つて「ソヴェエト」と不可侵條約を結んだ、この時は日本でびつくりしましたが、元々「ドイツ」と「ソヴェエト」は相容れないユダヤ人排斥問題、コミンテルン―共産主義に對する反對問題、これが日本が防共協定を結ぶことになつたことは皆さん御承知の通りで、ヒットラー總統の書きましました「マイン・キャンプ」余の闘争」にも書いてありますヒットラー總統の政策でありまして、殊に「ドイツ」の進むべき方向は東といふ所謂東進政策に従つて目標は「ウクライナ」といふことがハッキリ書いてあつたわけで、この東は「ドイツ」國民は無論世界に晋くばらまかれて居る、しかして「ドイツ」は「コミンテルン」を叩きつける、それにはどこを突いたら良いかといふことを盛に研究して居つた、「ドイツ」の進撃

の方向は「ポーランド」「レーニングラード」「モスクワ」を突く、これは嘗つて「ナポレオン」が進撃して引込作戦によつて破られた歴史がありますわけでありまして、「ドイツ」は「バルチック海」から「レーニングラード」を突く、これが最も「ソヴェエト」を突きますところの所謂成功率のある所と考へて居つたわけでありまして、それが爲に「ドイツ」は「ラトヴィヤ」「リトアニア」「エストニア」を自らの力の中に收めて居つたのであります、前の、二十年前の歐洲大戰でも、こゝから突いて出た歴史を持つて居るのであります。斯くの如く「ドイツ」は「ソヴェエト」を突く研究をして居りました。元々「ドイツ」は「イギリス」と戦はんで「ソヴェエト」と戦ふ氣持だつたのであります。が「ベルサイユ」條約を見て行くうちに「イギリス」こそ最も大きな最後の敵であるといふことが判つて参りました、兩面に敵を挟んで戦争をしては具合が悪いので「ソヴェエト」と手を握つたのであります、ヒットラー總統は「マイン・キャンプ」を全國の書店から集めてこれを皆焼いて、これを書いた當時と違つて來て「ドイツ」は「ソヴェエト」と争ふ意思のないことを證明したのであります。さうして後ろの方を一先づ抑へて置いて對英作戰に乗り出したのであります。

す、ところがこの「ソヴイエート」は「ドイツ」の弱味に付込んで「ポーランド」を「ドイツ」が取つた時は「ポーランド」の半分を取つてしまふ、そればかりでなく、ラトヴィヤ、リトアニア、エストニア三國を抑へてしまふ、更に「ドイツ」が「ルーマニヤ」工作に手を移すと「ベッサラビヤ」を半分に分けてしまふ、火事場泥棒式に自らの勢力を扶植して参つたので「ドイツ」の軍部は前から準備して「ソビエート」に目を着けて來ました。

五

ところが「ソビエート」は「ドイツ」のこの氣持が判らなかつたのでありまして、段々「ソヴイエート」が付込んで着々「ドイツ」の目に餘る行動に出て参りましたところから「ドイツ」は時機ある毎に叩き付けてやらなければいかぬといふことを考へて居つた、殊に「ギリシャ」戦争以來の近東方面に於て「ソヴイエート」の出やうは「ドイツ」と寧ろ反對の方向に行きつゝあるものでありまして、ヒットラーは何時か叩いてやらうといふので「ポーランド」の方に昨年九月に百萬の軍隊を集結しました。何時か「ソヴイエート」の軍隊を叩いてやらうといふ腹で居つたのであります。

この方面を旅行した者は兩者の關係の良くないことを見て居つたのであります。ところが「ソヴイエート」は前に「フィンランド」作戦を致しましたことは皆さん方覺えて居られる通であります、この結果軍隊を改變しなければならぬ、僅に「フィンランド」を相手にして、手こずつたのはこれは統帥に缺陷がありましたからで、「ソヴイエート」は御承知の通りに例のスターリンが肅清工作をやりまして、かたばしから偉い將軍を殺してしまひ、偉い將軍が居らない「ソヴイエート」の隊は完全に改變を行はなくてはならぬ状態であつた。「ドイツ」の方はどうかと言へば「ヨーロッパ」作戦が終りました、今が餘力が一番生じて居るのであります、「ソヴイエート」の軍隊が弱いといふ見當が付いて居つた、今日相對して居るのは「ワヴイエート」が百五十ヶ師團、騎兵三十ヶ師團、「ドイツ」は百八十ヶ師團ありまして大體兩方共軍隊の數に於てトン／＼の數を持つて居るが、「フィンランド」「ルーマニヤ」「ブルガリヤ」が「ドイツ」側に加擔して居りますから兵力から申しまして「ドイツ」側の方が多少有利に考へられる、殊に「ドイツ」側から申せば俺の所の一ヶ師團は「ソヴイエート」の三ヶ師團といつて居る位でありますから自信たつぷりでありまして、飛行機は

「ソグイエート」の方が六、七千機、それに對して「ドイツ」の方は「ポーランド」戦線に一萬機持つて居る、「ドイツ」の飛行機は全體で五つの部隊になつて居りまして大體四萬機と謂はれて居る、このうち二つの部隊一萬機がある、それから戦車の方は「ドイツ」六千臺、これに對して「ソグイエート」は七千臺を一寸出た位で戦車の數は「ソグイエート」の方が多いのであります。多いのであります。多いたが統帥といふものが所謂幹部級が「ソグイエート」の方は全く經驗のない者が多く、その上教育が上手く行なはれて居ない状態である。一方「ドイツ」は訓練に訓練を重ねて居るわけであり、これ等の點から見ました結果今なら「ソグイエート」を突く作戦はむづかしく、今なら一、二ヶ月の間に叩き付け得るといふ自信がヒットラー總統にありまして「ドイツ」の方から戦争を仕掛けたのであります。「ソグイエート」では戦争の起りました當日も「モスクワ」に於ては未だ戦争は始まつて居ないと思つて居た、「ドイツ」が三ヶ月も前から戦争を決意して居つたのに對して、「ソグイエート」が動員を始めたのは、八日前からといふやうに準備に於てそれ程「ソグイエート」は遅れて居るので、「ドイツ」は一ヶ月で叩き付けられるといふので「レーニングラード」「モ

スクワ」を連ねる地區を一氣に押へてしまふ、さう致しますと「ソグイエート」の四分の三でありまして「レーニングラード」と「モスクワ」以西であるから後は四分の一の「ソグイエート」の奥地の地區しか残つて居ない、如何にスターリンが「ウラル山脈」から以東に迄逃げて長期作戦をやらうとしても「ソグイエート」の後の國內を率ゐて行くことはむづかしからうと「ドイツ」側では見て居るわけであり、で「ドイツ」は「レーニングラード」から「モスクワ」に至る道を突きましてこゝに集結する「ロシヤ」の軍隊に對して徹底的打撃を加へてやらうと致しまして、新なる政權を樹立する、さうすると「ソグイエート」は自身で崩壊作用を起すだらうと見て居るわけで、今後「獨・ソ」開戦が如何なる方向をたどるかといふお話は我々がハッキリ申し上げ兼ねることであります、ヒットラーの前に申しましたやうな作戦振り聲明振りから致しまして、又「ソグイエート」は軍隊が改變中であつたといふ弱味、更に國民がなんの爲に戦争するのか教育が出来て居ない、戦争の準備といふやうな點から考へて私はやはり「ドイツ」が勝つと思はれる、短期間の間に「ドイツ」は叩かなければならないと考へて居る。「ソグイエート」は「ウラル」以東に引込み作戦をやつて

「ソグイエート」は「ドイツ」に對してゲリラ戦をやらうと考へて居ると謂はれるが今日飛行機が發達し戦車が發達した現狀に於ては「ナポレオン」當時の戦争とは随分異なつたものがあるわけでありまして、しかも「ドイツ」の空軍が殆ど壓倒的に開戦の初期に叩き付て居るので、恐らく「ナポレオン」の二の舞を演ずるといふことはあり得ないことであると思へて居ります。「ドイツ」は「スターリン線」に「ソグイエート」の軍隊を出來るだけ集結させて置いてその裏側から打込んで殲滅的打撃を與へたのであります。さうしてどこ／＼を占領したといふと「ソグイエート」に「ドイツ」の考へが判つてしまふ。それで單にどこ／＼の線に何千送つたといふやうにいつて居る。「ソグイエート」の方は御承知の通り新聞を御覽になつても判りますが、ラジオの外國電報を聴くことを禁止して居るので、これは恐らく「ドイツ」側の戰況報告を聴かしたならば今迄勝て居ると思つた「ソグイエート」國民は全く自信を失ふ、従つて「ドイツ」のラジオを聴かせないで政府の放送だけを聴かして國民を成可く實際の戰況から離しておかうといふのが「ソグイエート」の考へであらうと思ひます。

六

今日「ドイツ」は「ウクライナ」に對して「ドイツ」は戦争をし乍ら宣傳して居ります。「ソグイエート」はキリスト教の敵であるといふことを宣傳して居るのであります。「ウクライナ」の方面はクリスチャンが多いので「ソグイエート」から段々離れて行く、さういふ宣傳を今日やつて居るわけでありまして。この「ソグイエート」がラジオを禁止しました點から考へて「ソグイエート」が旗色が悪いのであらうといふことだけは豫想されるのであります。今日一部では大分「ソグイエート」の形勢が非になつて來て「ドイツ」が短期間に勝ちさうになつて來たといふことはそれだけ「アメリカ」の參戦が早くなるといふやうに言つて居ります。「ソ・獨」戦争の末へ「ドイツ」が優利になつて參つたことは、この戦争が片付いたならば後の方が片付いて後顧の憂がなくなれば「イギリス」本土上陸作戦に専念することが出来る。所謂「アメリカ」の參戦が急迫して日本も太平洋の問題が刻一刻急迫して參るといふことは覺悟しなければならぬ状態になつて參つた、即ちこの日本と致しましては所謂、今日迄我々が待つて居りました最後の問題が所謂日本と「アメリカ」とが太平洋に於てぶつかる問題が段々眼前にチラついて參りつゝあると迄へられると思ふのであります。この

日本と「アメリカ」との太平洋の問題は既に國民の方々にしば／＼當局から申上げて居りますやうに極めて大きな問題でありまして歴史始まつて以來の大きな他に類のない、「ヨーロッパ」戦争とは比較にならない老大な戦争になる、しかして戦争に對して所謂「アメリカ」を向へ撃つ日本の海軍は二十七日の記念日に報道部長が既に放送致しました如く、五百の艦艇と四千機に／＼とする飛行機をもつて我々の準備は出來たといふことを世界に聲明致して居る、何時なん時でもさあといふ場合に於て海上に於ける限りは安心して可なりであります。この日本と「アメリカ」の戦争は始まつたからといつて直ぐにやつて參ることはない、そこが海上の戦争と陸上の戦争の相違であります。陸上の戦争は一つの廣地面に兩軍が對抗してこれが數所に於て戦争を致しまして、これらの結成によりて勝つ、一ヶ所、二ヶ所が萬一破れても大事な場合に抑へて行つて最後に勝を制すれば良いのであります、海上の戦争はさうは參らないのでたつた一回の戦争に於て双方の海軍が死力を盡してぶつかると、ぶつかつたが最後負けた方は全滅される、日本と「アメリカ」の海軍が戦争をして殆ど殲滅的打撃を與へた場合、軍艦が「ハワイ」なり「アメリカ」の港に入るといふことになる途中で

一ツ／＼叩き付けられてしまふ。さうならば日本や「アメリカ」のやうに百萬トン以上の艦隊は五十年や六十年で出來るものでないので、「ロシア」の艦隊が「日・露」戦争に破れて以來今日迄何十年になるか僅に三十萬トンの海軍にしか過ぎないのであります、前回の大战に破れた「ドイツ」の海軍は二十萬噸であります。主力同志が打合つて破れた方はすつかり海上勢力を失ふ悲哀に泣かざるを得ない状態になるのであります、この海上の戦争に關する限り、日本と致しましてはたつた一回の戦ひで勝れなければならぬので、今日まで着々必勝の準備をして參りまして、これが我が準備なれりといふ状況になつて參つたのであります。しかしそれまでに所謂經濟戦争、言ひ換へれば通商の破壊戦がそこに起る譯でこれでチワ／＼相手を經濟的に弱めて相手のへたばつた所で、主力同志の打合と言ふことになつて參るので、この經濟戦争に於て國民がへたばらないことが一番大事であります。若しこの經濟戦争で國民がへたばつたならば二十年前にドイツが武力戦で一應勝ちながら國內の經濟戦争、思想戦争で敗れたものを見ても海軍が今日、我必勝の準備なれといつても、國民が銃後に於てへたばつたら、その力を現すことが出來ないので。我々國民は、銃後に於て強力

なる經濟體制を整へて、銃後から、絶対に白旗を揚げないといふことが、今日最も要望されて居る點であります。これにつきましては、幸ひ日本は銃後の戦に於て敗れな
 いといふ一つの玉手箱を持つて居る、これは皆さんお分りになる通り大和魂、日本精
 神であります。日本精神といふと、言ひ現し方が極めてむづかしいかもしれませんが
 これは何んでもない、日本人の持つて居るもの全てを國家に捧げる、畏くも天皇陛下
 に捧げ奉るといふ氣持、これが日本精神でありまして先程の、今日我必勝の準備が出
 來たといふ言葉は、何の準備が今日出來たか、これは所謂精神力が訓練によつて敵を
 抑へ得るだけの準備が出來たといふことを申上げたので、何んでも精神力によつて勝
 ち得ると言ふことを申上げて居る譯で、日本の海軍と「アメリカ」の海軍は、數から
 申上げれば七對十、數からは我々の方が少ない、この少い海軍力を持つて我々の方が
 勝つといふことは精神力で勝つ譯で、その爲に數十年の間訓練を重ねて、日本精神の
 極致を發揮出来る。

七

今日はそれが出来る力を持つことが出來たのでこれが必要ならば日本の海軍は勝味は

ないのであります。さういふ國家の總力戦になりました今日銃後の經濟戦争に勝たな
 ければならぬ。これには幸ひ國民は玉手箱を持つて居るので今日この極致を發揮致し
 まして、銃後の戦ひに勝つて戴く。經濟戦争に勝つには最後はやはり精神力でありま
 して、今日、物が不足だ不足だと言つて居るが、まだ「ドイツ」の武官等が東京へ來
 て見て、とてもおいしいものが食べられて羨しいと言つて居る位で、物資は外國から
 較べたらまだ／＼豊富で、先だつて圓タタの運轉手に聞いたのですが、ガソリンの統
 制の始めは五ガロンで二十軒しか走れなかつたのが、最近は八十軒走れる様になつた
 やはり心構へで違ふといふことを言つて居りました。

日本は物資が不足しても精神力で補つて行くことが出来るのであります。「アメリ
 カ」は如何に物が多くても國民が驕り高ぶつた生活になれて居るのでこの點では日本
 の方が寧ろ有利になつて居る。更に平たく申上げれば「アメリカ」は今日千百萬人か
 らの失業者があります。戦争になれば軍需産業に平和産業が移行するところに又失業
 者が多くなる。それから日本から買つて居りましたものが來なくなるので商賣がなく
 なり失業者が多くなる、それから銃後を預る上に於て最も大事なのは最近の戦争に於

ては婦人がしつかりしなければならぬのでありますが、幸ひ日本の婦人はお臺所の戦争では世界一番の辛棒強い性格を持つて居ります。「アメリカ」の方は全く何にも知らん、世界で、一番手のつけられん始末の悪い婦人が銃後を預る。そこに「アメリカ」と致しましては非常に弱い所がある譯であります。この經濟戦争は私を捨ててがっかり手を組んで戴かなければならぬ、さう致しますれば銃後の戦争に白旗を揚げることは絶對にありません。それに勝つたならば我々の舞臺でありまして、今日必勝の準備が出来て参りましたのでありますから、兩々相俟つてやれば太平洋の問題は、目出度く解決することになつて参りました、さうして東亞共榮圏の確立もその日米戦争の解決によつてとたんに解決致しまして、結極太平洋問題によつて同時に解決致しません。即ち根本的に見れば、事變處理が根本の問題には相違御座居ませんが、事變處理は英米の絆を絶たなければ到底解決し得ない。汪精衛氏がやつて参りました時、一緒に來ました周佛氏は言つて居ります。重慶政權は英米の援助の續く限り抗日をやめな

いと云ふことを言つて居る。
太平洋問題の解決によつて事變處理も行はれ、今一つ「ヨーロッパ」の新秩序、

「ムツツリーニ」の華々しい作戦に心を奪はれて今日事變第四年を迎へることになりました、萬一國民の中に日本の方も少しやつて見たらどうかといふやうに焦燥を感じる、斯ういふ人がある。又中には「ヨーロッパ」の方が終り極東だけ残されると大變だともいふことを取越苦勞して居る人がありますが、「ヨーロッパ」はさう簡単に片付かないのであります、「アメリカ」の積極的出様によりましては「ドイツ」と「ソヴェエト」の戦ひも長期戦を準備しなければならぬが、この日本が「アメリカ」を牽制してゐるので全然「イギリス」を援助することが出来ない、獨伊こそこの日本の力に感謝しなければならぬのであります。

「ヨーロッパ」の新秩序も「アメリカ」を牽制する日本が太平洋にありまして「アメリカ」の兵力を牽制して居ることによつて「ヨーロッパ」の新秩序も日本の力によつて始めて出来ると言ふことになると思ふのであります。

今日こそ「ヨーロッパ」「アジア」の新秩序、世界の新秩序になくてならん力でありまして、そこに日本の動きに「アメリカ」「イギリス」があらゆる手段を構じて今か今かと起上るのを固唾を呑んで眺めて居るのであります、國民と致しましてはこ

なせ生命保険を勧めめるか

それは――

生命保険が國民貯蓄の手近かな實行方法として採算的なばかりでなく、一身一家のためにも大きな準備財産を建設する近道だからです。

國民貯蓄組合法の實施は迫つて居ります。

一億國民は何れかの組合に加入して貯蓄に協力せねばなりません。此際帝國生命の貯蓄・投資・信託を兼ねる新種保險を御利用下さい。

契約高	二十八億五千餘萬圓
總資産	四億七千五百餘萬圓

帝國生命

(商工省届済)

本社 東京・丸ノ内

終